

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第19号 発行日 2010年4月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 2010年度部落史出張講座 地元で学ぶ地元の歴史

崇仁地区に関わる歴史についての講座を開催します。ふるってご参加ください。

- 第1回 5月28日（金）「川の流れに人の身は 近世 六条村の歴史」  
辻 ミチ子さん（元京都文化短期大学教授）
- 第2回 6月11日（金）「柳原銀行とその時代」  
重光 豊さん（柳原銀行記念資料館企画運営委員）
- 第3回 6月25日（金）「柳原銀行社屋保存運動からまちづくり運動  
歴史とまちづくりの交差」  
山内 政夫さん（NPO法人崇仁まちづくりの会）
- 第4回 7月9日（金）「菱野貞次と京都市政  
菱野は京都市に何を訴えたか？」  
白木 正俊さん  
（京都市上下水道局琵琶湖疏水記念館研究員）

\* \* \* \* \*

時 間：午後6時30分～8時30分

場 所：崇仁コミュニティセンター 多目的ホール  
京都市下京区上之町38 TEL：075-371-8220  
JR京都駅から東へ徒歩8分（河原町塩小路東入ル）

参加費：無料

協 力：NPO法人崇仁まちづくりの会

～参加希望の方は、当資料センターまで電話・FAX・電子メールでご連絡ください～

## 本の紹介

## 山路興造著

## 『京都 芸能と民俗の文化史』

村上紀夫

本書は、京都を拠点に各地の民俗調査と芸能史の研究を続けてこられた山路興造氏による、待望の論集である。山路氏が、芸能史・民俗芸能研究の最前線で多くの重要な成果をあげてこられたことは、周知の通りである。その著作は膨大でありながら、これまで論集として一書にまとめられていたのは僅かに『翁の座』のみであった。

公にされた論文は比較的入手の困難な報告書や機関誌に書かれたものも多く、これまではその全貌を見渡すことが容易ではなかった。今こうして、氏の論文のうち京都の芸能に関するものが一書にまとめられたことを、何よりも心から喜びたい。

まず本書の内容を紹介しよう。冒頭の「序」にかけて、月なみの京都では美しい文体で京都の四季が描かれる。前近代の史料と現代の民俗の間を軽やかに往復し、失

われた行事も紹介しながら京都の一年について語る。単なる紀行文ではなく、随所に山路氏による研究成果の要点が簡潔に述べられ、以降の論文で明らかにされる種々の問題を京都の一年という時間のなかで俯瞰できるように工夫されている。

続く「祇園御霊会と祇園祭り」には、所謂「祇園祭」に関する論文が集められる。第一章「二つの祇園祭り」では、「祇園祭」が祇園社の「御霊会」と町衆による「祇園祭り」の二重構造をもつことを指摘し、創始から現代までの変遷を描く。第二章「祇園御霊会の芸能」は、羯鼓稚児への関心から執筆されたもの。「祇園祭」を神社と信仰集団による儀礼とに区別する必要性を指摘する。神輿渡御は神社が主催して行うもので、専門の芸能が伴う形態は春日や稲荷でも見られる行列の典型である

と指摘。一方で鉦は疫神の神座として信仰集団により引き出されてきたものが、後に洛中町衆の手で風流の精神で飾り立てられたとする。また、室町期になると当時流行していた久世舞を演じる舞台のついた車が幕府によって奉納され、久世舞車が姿を消すと従来の鉦と舞車が一体化し、現行の「鉦」になるとする。そして久世舞という芸能は、女性だけではなく稚児も行うっており、稚児の主要な芸能が羯鼓稚児舞であることから、鉦の上で羯鼓稚児が舞をするようになったとした。「鉦」の成立過程を大胆に推測したもので、山路氏の議論の核心部分である。

第三章「祇園祭りの芸能と囃子」では、祇園囃子の変遷を明らかにする。囃子を鉦・曳山・傘にわけ、鉦の囃子は鉦上で行われる稚児舞を囃すものであったとし、絵画資料からその変遷を描き出す。一方で、曳山はもとも趣向として山の上で寸劇が演じられており、音楽も寸劇を囃すためのものであったとした。鉦の稚児や山の趣向が人形化することで稚児舞や寸劇の囃子が不要となり、囃子が鉦や山を動かすためのものに変容し、音が

大きく聞こえやすい鉦が中心になり現在のようになったという。こうして、現在なら誰もが鉦の音が想起する祇園囃子に、かつては鉦が入っていなかったという思いがけない事実が明らかになる。絵画や文献の楽器構成から、そこでの演奏された囃子を推測し、生き生きとした芸能の姿とダイナミックな変遷を説得力を持って描き出されている。「音」という歴史研究の対象とすることが困難なものを、絵画から復元して変遷を明らかにした手際は実に鮮やかだ。ただ、初出論文で掲載された四〇点を超える図版が大幅に省略されているのは残念であった。

第四章「補論 祇園祭りの稚児舞・再考」は二、三章初出後の批判に對して答えるものだ。主要な批判・疑問点を、羯鼓稚児の源流は女曲舞ではなく風流囃子物の羯鼓稚児舞ではないか、鉦の舞台は曲舞車とは別ではないか、羯鼓稚児舞は語りを主体とした曲舞ではなく稚児舞や延年などの系統ではないか、と整理する。これに對し、は囃子物の稚児は「踊り」の系統であり、一方で鉦上の羯鼓稚児は「舞」であり、「踊り」とは系

譜が異なると反論する。の舞車の問題については再考の余地もあることを認めるが、多賀社参詣曼茶羅の舞車を批判の根拠とするこ

とに対しては、他所の舞車を例に反論する。異論を認めつつも自説を修正、補強して今後の研究にゆだねている。

五章「室町幕府と祇園祭り」では、女歌舞の賀歌と幕府の関係などから、曲舞車は「新参の京都支配者であった室町幕府がパトロンとなつて、新たに奉納されたもの」と推測する。山鉾を女歌舞の舞車に始まるとする氏の議論では、鉾を神聖視して女性を乗せない禁忌が問題になるが、六章「祇園祭りの鉾と女性」で元和年間の「洛中洛外凶屏風」に描かれた鉾に多くの女性が乗っていたことを指摘する。鉾に女性が乗ることが古くから忌避されていたという先入観を覆すものだ。七章「もう一つの鉾祭り」は、祇園祭以外にも鉾祭りが洛中洛外で行われ、現在も近郊農村部で古いかたちが伝承されていることを指摘する。

こうした山路氏の一連の研究により、中世から近世にかけての祇園祭の変遷が明らかにされた。羯

鼓稚児舞や久世舞といった芸能から迫るのは、政治史や経済史の視点からは出てこない、山路氏ならではの切り口であるといえる。近年、中世の祇園会について盛んに論じられるようになったが、山路氏が祇園祭の構造を整理し、神社・町衆に加え室町幕府などの関与を示す論点を提示されたことで、民俗学と、中世史のなかで論じられた中世都市論や町衆論の視点、さらに芸能史などの議論を共通の土俵で議論する下地が作られ、のちの研究につながったということもできる。

続く「京都の民俗芸能」の第一章「大念仏狂言考」では、念仏会としての大念仏と大念仏狂言とを混同したり、壬生を中心に論じた大念仏狂言に関する先行研究を修正する。まず大念仏会と狂言を区別し、大念仏会は鎌倉中期以降、融通大念仏勧進の僧により広められ、京都の庶民の集まる寺院で行われて南北朝期から室町期に隆盛を迎えたものとし、大念仏会と狂言の始まりは別に考察する必要があるという。大念仏会のなかで狂言が行われていたことが文献や絵画から最初に確認できるのは千本

焰魔堂であることを指摘し、千本・壬生・嵯峨の各寺院で行われる狂言それぞれの特徴を明らかにした。

第二章「六斎念仏考」で六斎念仏について論じる。南北朝から室町期にかけて成立した「六斎衆」が念仏を修するようになり、のちに干菜寺（光福寺）が六斎念仏衆を支配するが、京都近郊村落の六斎念仏が盆に町まわりを始めると、次第に芸能化して干菜寺とは溝を生じたという。そして、干菜寺から離れた集団を空也堂が支配したことを明らかにする。また、京都の芸能六斎にも鉦の曲には他地域の六斎とも共通するものが伝わっており、六斎念仏が、芸能の行き交う京都ならではの発展を遂げたものが芸能六斎であるとする。

なお、山路氏は干菜寺や空也堂の存在を「信仰的支柱」「精神的支柱」と表現するが、近年の芸能者や宗教者に対する近世的本所支配の研究成果を踏まえれば、六斎衆と干菜寺・空也寺との関係には精神面だけではない、現実的利害も考える必要があるだろう。

第三章「やすらい花考」は、平安期の政治状況との関係で「やすらい花」を論じる河音能平氏の研

究に対する問題提起である。河音説に理解は示しつつも、政治的につくられた単発の行事は定例化しないとし、「やすらい花」の形態も音楽も既存のもので、基本的には政治的意図に関わりなく、既に存在していた疫神に対する民俗が原動力であると見る。このあたりが、政治的事件を画期として明確な始点を設定しようとする政治史と、下地に民俗の心意を想定して始点を無限遠に設定する民俗芸能の視点の違いであろう。重ねて氏は「やすらい花」は平安期から続いてきたわけではなく、郷民の祭りとして室町期に離子物として再出発し、近世には『梁塵秘抄』の歌はうたわれず、現在のものは明治期に復活したものであると指摘する。第四章「松尾社の御田植祭り」では、松尾社の御田植祭りについて、進行や氏子の関わり方について明らかにし、現況についても触れる。

次の「京都芸能史考」の第一章「山城国一宮賀茂社の御戸代神事」も田植神事についてのものだ。御戸代神事が諸国の一宮で行われていた勸農儀礼としての田植え神事であったことを明らかにする。

第二章「貴船のささ神輿考」では、上京の子どもが「ささ神輿」と呼ばれる小さな神輿をかく行事について論じる。『日次紀事』から、一六世紀の後奈良天皇の時に流行病で多くの子どもが死んだ際に、貴船社を鎮めるために行われた行事であるという伝承を紹介し、続いて上杉本洛中洛外図などの絵画資料で一六世紀に行われていたことを確認する。さらに『山城四季物語』に「弘治二年」開始と記されていることに着目する。同時代資料から確かに弘治二年に疱瘡で多くの子どもが死んでいた事実を明らかにし、ささ神輿の成立を弘治二年とする伝承は史実を反映しているかと推定する。すると、ささ神輿の有無は上杉本洛中洛外図や風俗画などの絵画資料の成立年代を判定する材料にもなりうるかと指摘している。

地誌や随筆を歴史史料として積極的に活用する方法には、私自身も関心があったので、初出論文を読んだ時はその鮮やかさに大きな衝撃を受けた。ただ問題は、約百年後の地誌が弘治二年という年代まで正確に史実を伝えているかどうかである。疱瘡流行という文献

の記載と地誌の伝承、絵画の推定成立年代の一致から、絶対年代を設定しうるだろうか。

絵画の成立年代については、美術史に不案内な評者は発言を控えない。弘治二年当時の文献に疱瘡流行の事実が見える点だが、『山城四季物語』のささ神輿に関する伝承では「疱瘡」ではなく「咳逆疫病」（あるいは小児喘息だろうか）であり、状況証拠として採用するには若干の不安が残る。また、『日次紀事』の著者黒川道祐は、『遠碧軒記』に「小狭輿の事に今一説有、田舎にて老婆をちやと云、後奈良院のときに、貴布禰より狂婆来るを、洛中の小兒驚てちやあちやあが来ると云て、逃奔ては其まゝ疫をやむ。于時これは貴布禰たゞりとして、小き神輿を造かきありきてあれば、そのまゝ各平癒す。それ故にちやあちやあこしという事と云なり」と別の伝承を載せる。「貴布禰の神の祟」に後奈良天皇が「宣下ありて、疫病をばらはせ」たことを創始とするという伝承も確定したものではないようだ。山路氏の地誌と文献・絵画をリンクさせる手法に魅力を感じるが、不安定な根拠に相互依存し、際どい

均衡が保たれている状況に思えてしまふ。『日次紀事』に「貴船狭小神輿」を「一説是誤、幸神神輿」としているように祭神が曖昧であることから、貴船神社や幸神社とは無関係な、上京の子どもによる行事であると思われる。しかも、伝承する神輿が「特定の神社に保管されるのではなく、町組によって当番で管理」することもそれを裏書きする。一六世紀半ば頃に神社とは無関係に上京の子どもの間で流行神を祀り神輿をかく行事が始まったという程度の結論にとどめておいた方が無難ではないだろうか。

最後の「京都の民俗行事」の「京都の盆行事」と「京都の盆踊り」と民俗行事」は盆行事や烏帽子着・修正会などについての報告である。報告書の原稿として書かれたものだが、単なる事例報告にとどまらず、史料にもとづく検討が加えられている。なお、「京都の盆行事」について、「収録論文解説」では一九八八年の無形文化財記録作成時に執筆した原稿で、初出は一九九八年『無形の民俗文化財記録』とするが、一九九二年の『京都市歴史資料館紀要』一〇号

で既に公にされている。

以上、やや詳しく内容を見てきた。著者の手法は芸能や民俗を歴史的背景のなかで理解し、その歴史的背景の変遷やそれを受容した社会像を説明しようとするものだ。そのため、氏の研究は芸能・民俗のみならず、歴史学にも多大な影響を与えていることは周知の通りだ。

山路氏は「芸能」の機能と類型（『講座日本の民俗学』）において、芸能研究の原点は、昭和三〇年代に旅先の村で見た祭の体験や戦争直後の焼け野原で見た芸者衆の総踊りの記憶であり、民俗芸能調査では常に「芸能」の機能とその力を考えているという。そうした体験が、芸能よりも芸能を受け入れた社会や芸能を必要とした共同体の側へ関心を向かわせたのかも知れない。とはいえ、芸能に無関心であったわけでは決してない。『五来重宗教民俗集成5』の「解説」で、「芸能史を考える場合には、それぞれの芸能が持つ芸能の具体像をしっかりと頭に思い描く、すなわち、時代に生きる芸能の実態を、映像として頭のなかで動かし、それに熱狂する民衆像を、文化史の上に定着させること

にこだわって「いたと述べている。山路氏は歴史的手法で社会生活のなかの文化現象として芸能を見る「環境論」では、「周縁の環境や時代相は明らかにできても、芸能そのものに迫ることは難しい」という限界があることを指摘しているが、多くの民俗芸能を実見している山路氏は、史料や絵画に出てくる芸能を具体的にイメージしながら、芸能と社会の関係について論じている。政治史や経済史から社会を構成する一要素として芸能を見るのではなく、芸能の変遷を明らかにし、そこから変化をもたらした社会にまで踏み込んで論じている点特徴だ。

こうした方法論について、山路氏は前掲「解説」で次のように語っている。関東で学生の頃から民俗芸能を調査していた氏は、調査成果をどのように学問とするか悩んでいたという。そうしたなかで、五来重氏の論文「芸能史と民俗芸能」(初出は『芸能史研究』第一号)と出会った。五来氏は、民俗芸能は文献上の芸能や古典芸能と交渉があり、「芸能史研究に民俗学をもちいることは常識」と断じていた。民俗学的方法に懐疑的だった

山路氏は、「民俗学と歴史学のドッキング、それも芸能に関する文献史料の少ない芸能史の分野に、地方に残る民俗芸能を説得力ある資料として援用し、また逆に、地方伝承の民俗芸能研究に、中央に残された文献史料を使って、その伝播や変容の歴史を具体的に明らかに「するとともに「それぞれの時代の人が熱狂した芸能の具体的な姿を描き出した日本芸能史が書きたい」と「若き心を躍らせた」という。本格的な芸能史研究が始まるうとしていた関西の動向に強い影響を受けた山路氏は、関東から京都に活動の拠点を移し、多くの成果を世に問うたのであった。本書を見ると、確かに文献史料と民俗芸能を駆使して芸能史を描くという「若き心」に抱かれた目標が見事に実現されたことが明らかにする。

これは、京都というフィールドとの邂逅が成功に導いた面もあるだろう。長く都が置かれた京都は、芸能に関するものは決して多いとは言えないが古代から中世にかけての史料の量はやはり群を抜いている。その上、洛中洛外図や風俗図などの絵画も残る。そして近世

には年中行事を日毎に記した『日次紀事』という希有な史料が残り、近代においても戦前に京都の宮座や講の行事を記した井上頼寿『京都古習志』があり、戦後に失われた行事も一端を窺うことができる。かかる条件に恵まれたことで、史料により行事の変遷を長期にわたって追うことが可能になったということもできる。こうした諸史料を芸能史料として駆使する手法そのものが山路氏らによって開拓されたものである。山路氏の研究は、そこで明らかにされた多くの事実に加え、方法論も含めて評価される必要があるだろう。

ただ、近世史に関心がある評者としては、全体的に躍動的に叙述された中世に比べ、近世の評価が相対的に低いことが気にかかった。中世は、町衆の経済的発展と共同体の成熟が風流踊りや祇園祭のような祭や芸能を発展させると積極的に評価されるが、近世は近郊農村の芸能や大念仏狂言を取り入れた近松の手法などを除けば、概して消極的な評価である。例えば、祇園会の稚児舞や風流踊りの形骸化、女性をめぐるタブーの発生、千本間麿堂の特色喪失などである。

多岐にわたる豊かな論旨を、印象論に基づいて単純化して批判することは慎まないといけないだろう。だが、『翁の座』の序を見ると、こうした整理も当たらずとも遠からずといえそうなのだ。氏は芸能の本質を一回性にあるとし、時と場を共有した者の共感を重視する。そこで人の耳目を驚かせる一回性に本質を求めた美意識である「風流」を中世文化を解く鍵と見る。その上で、近世に「風流」の精神は歌舞伎などを除けば「封建体制のなかで影を薄めていく」とする。このような「風流」を中心に芸能を見れば、確かに芸能が固定化することは「形骸化」といわざるをえなくなる。そして、山路氏のような芸能や文化の創造や変容を歴史的に明らかにし、そこから社会を照射する方法論では、芸能が固定化した近世社会は必然的に停滞した社会とされる恐れがあるのである。また、貴族や室町幕府が衰退した頃に町衆の経済的発展と共同体の成熟が「風流」を生むが「封建体制」によって停滞せしめられたと見るならば、民衆自治が戦国期に一向一揆や自由都市堺として高まりを見せるが、近世には

武家に屈服させられるという、戦後マルクス主義歴史学の歴史観を無意識になぞっているようにも見えてしまふ。

「風流」という視点からすれば、「固定」は形骸化であり、「創造性の喪失」かもしれないが、一見すれば「固定化」したように見える社会を積極的に位置づけることが、政治史や経済史ならぬ民俗学や文化史・社会史の手法であれば可能だったのでないだろうか。また、風流踊りの流行歌謡の移入や、六斎念仏が様々な芸能との交流から芸能六斎を生んだこと、近松が作品中に壬生の大念仏狂言を趣向としたことのような、いわば文化の増埒ともいえるべき社会のなかで相互に影響し合い化学反応を起こす状況を、文化創造のひとつの形態として見ることはできないだろうか。多様な情報が行き交うなかで、芸能やメディアの直接・間接の交流を積極的に評価するならば、近世も違った見え方をしてくるのではないだろうか。最後は「ないものねだり」になってしまつたが、山路氏が新たな角度から光をあて浮かび上がった中世像の鮮やかさを見るにつけ、中世と同じ

ように新しい近世像が描けないかと思わずにはいられない。無論、これは山路氏だけに求めることではなく、私自身に課せられた課題でもある。

以上、拙い紹介に終始した。実は、評者も氏が代表を務める芸能史研究会などでご指導いただいた。研究会では氏のご意見に対して、何か違った新しいことを言えないかと論戦を挑むのだが、いつも論破されてしまふ。そうした意味で私自身にとつては前に立ちはだかる大きな壁である。事務局から本書の紹介をご依頼頂いた際には躊躇したが、今回は敢えて胸を借りるつもりで紹介をさせて頂いた。誤読や理解不足のためのはずれな批判もあるうし、紹介の域を超えた部分があったかもしれないが、遙か彼方を駆ける山路氏の後を青息吐息で追いかける後進による精一杯の「挑戦」としてご容赦いただきたい。

(思文閣出版、二〇〇九年、A五判、三六八頁、七五〇〇円+税)

## 本の紹介 上原善広著

### 『日本の路地を旅する』

竹森健二郎

「路地を旅する」というと、ひところの赤瀬川原平たちがやってきた路上観察学とか、テレビだとNHKの「プラタモリ」みたいなものを思い出した。なんとなく、日本各地の下町の路地を歩きながら、「まだ、江戸情緒が残っていますねえ」という類のものだ。

もちろん本書はそうではない。ここでの「路地」とは被差別部落

のことで、中上健次が被差別部落を「路地」とよんだのに倣い、著者もそう呼ぶようになったという。著者は、大阪更池の出身。「独りで旅するなかで路地を見つめ直したい」と思い旅をはじめ、その旅は「路地と路地とをつなぐ糸と糸をたどるような旅でもあった」という。

まずは、筆者の故郷である大阪は、「第一章 ルーツ 大阪・更池物語」で語られる。

更池は食肉業の土地で、父は、商売のためなら共産党から部落解

放同盟、同和会はては極道までも利用していた。節操がないというものではない、行政からの保護をうけながら生活していくだけでは生活は成り立たず、それ以外の「別種の才覚」が必要とされた。父の才覚は「路地の中でもとても評判が悪かったが、本人はそれを何とも思っていなかった」ことだった。

団地の中では犬は飼ってはいけなかったが「そんなことは皆お構いなし」。母は無免許で「更池の中だけは良いという独自のルール」で原付を運転していたという。幼い頃の思い出は、ドブ川に突っ伏して死んだ牡牛や障がい者で車いすの「車イス隊長」だったり、保育所の二階から三輪車で滑り降り投げ出されて気絶したこと、銭湯に行かず団地のベランダで簡易バスタブに入ったこと、狭山のゼツケン登校でさえ「ちょっとしたお祭り騒ぎで楽しいものであった」。

「第二章 最北の路地」は、八戸、弘前、秋田だ。

八戸には寛文年間に別の地域から皮革職人として請われ、移住したのが路地の始まりという。文政期には、加賀藩からもう一軒皮革職人を移住させ、明治初年には八軒・五人までになったが、現在では消滅しているという。

弘前では、小林と谷口の二人の太鼓職人から話を聞く。津軽の太鼓は馬皮を使うという。音が軽いからねぶたにいいのだそうだ。皮の毛抜きは臭気が凄く、差別などはないが、「孫が臭いって言うて来なくなる」のだそうだ。

弘前には「追掛稲荷」があるという。この稲荷は「長吏乞食頭 追掛長助」を祀る。この長助の由来は、たしか『編年差別史資料集成』で紹介されていたことを覚えているが、まさか弘前に長助の稲荷社があるなんてことを思ってもみなかったから、これには正直驚いた。こんな現地に行っただけからないことがあるのだ。

秋田の路地は「茨城県から左遷された大名、佐竹義宣に従ってきた者たちが始祖とされる。そこにもともと港の方にいた中世から続く工タたちも合流」したのではな

いかと推測されるという。少ない記録によれば、城下町周辺にあった路地は、皮細工の店が並び、袋物や雪靴・足袋を軒先に並べていたという。二五年前には秋田の路地は「太鼓、はく製、精肉、靴製造などの店が集中」していたが、現在では閑静な住宅街へと変貌し、面影が残るのは二軒の肉屋くらいだという。

市内から移転した皮職人の津島さんは、現在では太鼓の製造と剥製を生業とする。太鼓は夏場、冬に剥製を作る。津島さんの太鼓皮は、自分で屠場から仕入れ、自分でなめす。馬皮には違いがないが、牛皮は黒毛和牛の牝が一番上等だそうだ。肉も黒毛和牛がうまいから、皮と関係があるのかと思ってしまう。郊外に移転してきたのは臭いがあると苦情があり、それで今の場所に引っ越したという。弟子になるには、一五〇万円。太鼓一ヶ月で一〇〇万円、剥製一〇回分で五〇万円という。うーん、これが高いのか、安いのか。

「第三章 地霊」は、ちょっとおどろおどろしいタイトルで、ここの路地は東京と滋賀。

東京墨田区には、皮なめし工場や石鹸やラードを扱う油脂工場が

二〇軒程ある。そのため、以前には「あの臭いところ」といわれていた。輸入皮が入ってくることにより、一〇〇軒程あった工場は激減したという。東京のガイドは木口くんという資材工場に勤める青年だ。

墨田では、戦後東北からの移住者が多く、二三区の路地に住む多くの人は路地とは直接関係ないという。実際木口くんの父親も集団就職で福島県から出稼ぎに来たらしい。また、皮工場に就職する日本人はほとんどおらず、従業員はセネガルやガーナのアフリカ人が多いという。木口くん曰く「臭いって言われるのが嫌」だが引越そうと思っただけではないという。親切な人が多くて「この町が好き」だからだそうだ。部落差別は「最近では落書きがある程度」という。

「東京にいと部落ってほとんど意識しない」という東京の若者たち。著者はそれでも結婚の時に気にならないのか、と食いさがるが、「全然気にならない」「ちょっと気になる」といった感想は、そのまま、著者へとオーバースラップする。受けたことのない差別を心配することより「路地というものを背負ったことによる間接的な影

響が大きい」からだ……。

部落問題とは直接は関係はないが、板橋の岩の坂が紹介される。昭和五年の「貰い子殺し事件」という猟奇的な犯罪で、一躍有名となった岩の坂のスラムは、第二次世界大戦の空襲で灰燼に帰し、敗戦後の都市計画により消滅した。東京の路地も、その多くは高度経済成長期から東京オリンピックを前後して、路地から出て行く人、出稼ぎなどで路地に入ってくる人が多くなり、「いわゆる路地の系譜をもっている昔ながらの人は一〇分の一もいない」と著者は推測する。

東京の肉食文化は豚が中心で、牛は近江牛が中心だという。滋賀県の路地から、明治に入り移住が進んだことに関係している、という。近江彦根藩は、近世から牛の屠畜を行い、肉は味噌漬けにし將軍家や各地の大名に贈られていた。幕末になると近江のかわたたちは、約六〇キロも離れた京都まで天枰棒を担ぎ牛肉の行商に出かけたという。

食肉業で潤っていた滋賀のある路地は、「解放令」以降皮なめしなどの生業を捨て、現在は電気工事を地場産業としている。山の斜

面に路地があつたので、電柱の木材の伐りだしから始まり、結果的に電気工事が地場産業となつたといふ。

著者の歩いた滋賀の路地は、「寝た子を起こすな」で「あまり差別をいわんほうが良い」という方針だそうだ。路地の中心を流れる「清水川」は、近世には皮なめしも行い、非人が平民に戻る際の「身を清める」儀式をした川だったが、もちろん今ではその面影はない。

「第四章 時代」は、山口と岐阜を歩く。

山口では光市を訪ねる。九州から嫁いできたという路地のおばさんは、最初は言葉がわからず「お嬢さんが来た」といわれていた。言葉がわからなかったのは、「サンショウ」と言われる隠語が多かつたからだ。昔は「みんなすこい貧乏でした。確かにヤクザ者も多」かつたが、今では「静かで住みやすい町」になつたといふ。

吉田松陰に手による「討賊始末」は、宮番・登波の二〇年をかけた敵討ちの記録である。この敵討ちのきつかけとなつた現場の滝部八幡には「烈婦登波の碑」があるが、著者は嫁ぎ先の神社へと赴いてい

く。苦勞して尋ねだした神社は、社殿の他はなにもなく、近くの老婆によると「昭和二五年頃まではここにも宮番が住ん」でいたが、「萩に引越した」といふ。

岐阜では、北原泰作の甥である中山さんを訪れる。中山さんは東京で生まれたが、北原の直訴事件により、岐阜のKという路地に引越してきたといふ。Kは近世初頭に、加藤貞泰という大名に従つて来、そのまま居ついたのが始まりだ。ここでは、ほとんどが靴職人が皮なめしを生業としていた。中山さんの家ではコウモリ傘のすげ替えと犬肉の行商をしていた。犬肉は「野獣肉」として販売していた。

草履作りの小田さんの紹介で、三味線の皮張り職人の中野さんを訪ねる。「猫皮は中国で、犬はタイからの輸入だ」そうだ。中野さんの仕事は猫皮のなめしまで、そのあとは三味線を組み立てる職人のもとへ送る。差別は「皮なめしは犬とか猫皮だから一番きついな。部落の中でも一番きついな」といふ。

「第五章 温泉めぐり」、温泉場といえは大分の別府だ。ここでは、別府の的ヶ浜と長野を歩く。

的ヶ浜焼き討ち事件の概要が語られるが、的ヶ浜は現在地名にその名をとどめているだけだ。ここでは路地を歩くのではなく、別府の夜の繁華街のわびしさが語られる。

信州の野沢温泉の路地は、墓地の中にあつたが、墓は移転し「今は何の変哲もない民宿街へと変わった」。上諏訪温泉の路地は、密集した住宅街へと変貌している。近世には、街道警備や牢屋の仕事を務めていたといふ。ここは茅野の山城で番太をしていたのが、高島城ができた際に城主に従つて移転した来たといふ。別所温泉の路地は、近くのHという路地からの移転といふ。Hの路地は美濃国からの落ち武者といふ伝承を持つ。このHから別所温泉に湯番として、新兵衛という者を出していたが、のちに新兵衛が独立したことが、この別所温泉の路地の始まりといふ。現在では、宅地として開発され、区別はわかりにくくなつてい

る。

「第六章 鳥々の忘れられた路地」では、新潟の佐渡と対馬を歩く。佐渡の路地の特徴は、非人と「えた」の区別がないことだ。資料には非人とあるから、基本的に

は非人集団であつたのだろう。ここでは、北陸の能登から来たといえらる非人頭久六が代々世襲で皮なめしや牢番などを担っていたといふ。そのせいか、佐渡では路地のことを「ホイト」と呼ぶ。近世期には相川の非人集団が一番大きく「二六軒二三〇人」と記録される。現在の相川は廃屋が多く、人が暮らしているのは一〇戸程度という。佐渡全体が過疎化している中、路地も又同様だった。佐和田の路地は、自動車ではとても通ることのできない小路を挟んで一五軒ほどが並ぶ。この路地も「一〇年もたてば、廃屋だけの寂れた無人の地になつてしまふのは確実」だと思えるのだ。佐渡では話らしい話はほとんど聞けなかった。

対馬では路地に対する差別はこれまで旅の中で一番きついなところのようにみえる。

食堂のオヤジさんは「結婚の時は今でも言います」といふし、五〇代の主婦は以前息子の路地の友達のことを、学校の会合で「家に入りさせない方がいい」といわれ、地元有力者は「彼らのことは、エタとかヨツと呼んでました」「地元の者は結婚しません」と言い切るのだった。



路地の老人に案内してもらおうのは、断首場と呼ばれていた刑場だったが、途中で「ママシがたくさん出るから」ということで断念せざるを得なかった。

「第七章 孤独」は、鳥取と群馬を歩く。

明治中期に松江市に住居していた小泉八雲は、被差別民を「ハツチャ」「小屋の者」「山の者」「エタ」と分けて表現していた。「小屋の者」とはいまひとつの「えた」系の路地、「山の者」は非人系、「ハツチャ」は鉢屋。鉢屋は、一九七六年には「県内最後の『鉢屋』姿消す／拷問跡の大黒柱／県警に保存」というタイトルで『新日本海新聞』に報じられたそつだ。

鉢屋の末裔である武田さんに話を聞く。武田さんは「若い頃に一度、結婚を決めた相手がいたのだが、鉢屋と言うことで破談」になり、それ以来独身で暮らしている。群馬の話は、路地の出身で、二〇〇二年に女子高生を殺害した山下という男の話を中心に進められる。山下が育った路地には、三つの組に分かれる。「白山神社の組」「山神の組」「稲荷神社の組」がそれで、それぞれに違ったルーツ

の伝承を持つ。山下は「白山神社の組」に生まれ、実家は畜産業を営み、路地一の富豪とまでいわれていたが、山下が高校の時に倒産し、それから転落の一途を辿ることになった。中心とはいっても、著者はあまりこの話に深入りはしない。同じ出身ということも含め、著者と山下と「何か深い間がどこかで連なっているような気がして」「深く事件に関わることが不安」だったからだ。

「第八章 若者たち」「若者たち」つていうと、なんか六〇年代代している、ちょっと気恥ずかしくなってきましたが、長崎と熊本の若者たちの今だ。

長崎の山本くんは長崎県大村市の出身で、サーフィンが生き甲斐という二七歳。彼は被爆三世、「部落出身で被爆者でしょ。もう敵なしですよ。まさにサラブレッド」なんだそつだ。山本くんよりひとつ後輩の岡崎くんは、不動産会社で働く若者。不動産関係の差別はあるにはあるが、彼が経験したのは三件だという。やはり、同和地区は「マイナスポイント」だそつだ。で、岡崎くんにとつての部落は「故郷」だそつだ。

熊本では道仁会系のヤクザの武

藤くん。武藤くんのシノギは、闇金融に風俗それに美人局などの恐喝だ。武藤くんは件の中学代表として部落研の活動も牽引し、高校生の時には県民集会で泣きながら決意表明をし、「部落民宣言」もした程だったという。高校卒業後理髪店に勤めるが、アトピー性皮膚炎のため仕方なくそこを辞め、道仁会系下部組織の構成員となった。武藤くんのシノギは実家の借金と看護学校に行っている妹の学費になるのだそつだ。

「終章 血縁」では、沖繩を歩く。沖繩には路地はない。しかし、本土から移住した念仏者や京太郎と呼ばれた被差別民がいた。今日では、京太郎はエイサーを先導する道化役としての認識しかない。京太郎はもともと人形回しの芸であったが、今は廃れているという。京太郎の舞は、京都から来た京太郎達の恨み節だ。京太郎達の村は安仁屋村といい、古地図には「行脚屋敷」とあるところから、門付けに由来する名であるようだ。安仁屋村の跡は住宅街となり、京太郎たちの痕跡は何もない。

以上のように、ある路地を訪れ、現況と歴史的な由来を叙述していく、歴史ルポルタージユのような

スタイルが進められ、いわゆる「えた」系の路地だけではなく、非人系や芸能者の路地など、ひろく被差別民の路地を訪ね歩く本書は、その意味ですぐれたルポルタージユであるといえる。

著者の路地へのこだわりの旅は、「各地の路地を訪ね歩くことで、少しずつ自分の心の中で傷つき途切れた系をつむいでいたのだろう。路地の歴史は私の歴史であり、路地の悲しみは私の悲しみである。私にとつての路地とは、故郷というにはあまりに複雑で切ない、悲しみの象徴であった」というとき、著者にとつては路地を求めて歩くそのことが、自分自身を捜し求める旅であるのだろうか。それとも、センチメンタルジャーニーなのか。最後に、文中には本書を做つて「路地」という表現としたが、なれないせいもあるだろうが、なんとなく違和感が残ってしまった。尚、本書は第41回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞している。

(文藝春秋、二〇〇九年、一六八〇円)

## 史料紹介

## 『京都日出新聞』連載の「山家」記事について

中村久子

(佐賀部落解放研究所)

はじめに 遠い記憶

佐賀に背振(せびり)という名の山がある。標高一〇五五・ニメートル、佐賀県の北東部に位置し、尾根は福岡との県境をなす。和銅二年創建の靈仙寺を中心に「背振千坊」と称せられた修験道場がひしめく信仰の山であったが、筑紫山系の最高峰として玄界灘と有明海ふたつながら見渡せる軍事的要衝でもあった。近世前期、その頂上の領有をめぐる筑前福岡藩と肥前佐賀藩が一〇年ごしの争論を繰り広げたのも故なしとしない。

その背振山について、「セフリ」という名は漂泊民の「サンカ」と何らかの関わりがあるのではないかという質問を受けたことがある。サンカの住居、またサンカそのものをさす「セフリ」と、音が似通っていることからの問いで、調べてみたが、管見の限りでは関係性を見いだすことはできなかった。サンカと呼ばれた人びとが、九州にもかつて存在したことを聞き知ってはいたものの、一九五四年生まれの筆者にとっては書物のなかの

知識にすぎなかった。にもかかわらず、その時、ふいに蘇ってきたのは、「ミノサキゼンモン」という言葉であった。すっかり忘れていた言葉であった。

佐賀の「ミノサキゼンモン」

その言葉を、いつ、どこで聞いたのか、まったく憶えていない。おそらく幼児のころ、祖父母や周辺の老人たちの口から発せられたそれが、記憶の底に沈んでいたのだろう。

「ゼンモン」とは「禅門」であり、本来は仏教用語であるが、九州と富山県の一部では物もらい・乞食の称である。たとえば佐賀藩の史料に「新小屋禅門」という語がみえるのは、宝永七年(一七二〇)に再び建て増しされた新しい非人小屋に住む乞食の意で、非人の別称である。佐賀藩の非人身分の人びとは、乞食がもつぱらのなりわいであった。「ミノサキゼンモン」というのも同じ用例で、箕を製造販売する乞食といった意味あいが使われたのであろう。むしろ「蓑」を着た乞食をさす言葉であった可

能性は否定できないが、往来で物を乞う人びとを筆者自身一九六〇年代半ばまではたしかに見た覚えがあり、そうした人びとは僧形の人であれ白衣を着た傷痍軍人風の人であれ、風体にかかわらずなべて「ゼンモンサン」であり「ミノサキゼンモン」とは呼んでいなかった。九州にはほかに「ミツクリクワンジン」という呼び方もあったとい、東日本におけるサンカの呼称「ミツクリ(箕作り)」、「ミナオシ(箕直し)」、「ミヤ(箕屋)」、「ミーヤ」、「ミーブチ(箕打ち)」を想起させる。そこに強烈な賤視が付随していたことも相似している。

筆者より二、三歳年長の女性の脳裏には、幼いころ、子連れの貧しげな一団が定期的によって来て村はずれの祠などに宿っていた姿があるという。昭和初期に生まれ一人たちには、箕やソウケ(箕)を背中に担いだ行商人たちの様子が鮮明に残っていて、「当時は一段低い人たち」という感じで見ていた」と、やや口ごもりながら話す婦人もあった。そうした人たちがどこから来ていたのか、確かめることはできなかった。佐賀には農家の副業として竹製品を作るところも少なくなかったが、彼らは「一段低い人たち」とは認識されていない。「ミノサキゼンモン」とは、竹製品を扱う特定の行商に

投げられた呼称のようである。充分に差別的な視線を伴っていたと聞くが、明治生まれの老人たちなどは、戦後もさほどの抵抗もなくそれを口にしていたらしい。筆者の記憶の底の「ミノサキゼンモン」も、家族や隣人たちの会話の断片が耳にとどまったものなのだろう。佐賀の民俗学関係の報告書にサンカとおぼしき記述は僅少だが、筆者の生まれ育った佐賀の有明海沿岸地方の農漁村に、少なくとも一九五〇年代半ばころまでは竹製品をひさぐ行商の小集団が廻っていた痕跡のひとつといえるのではないだろうか。

ルポルタージュ

京都の「山家」

このほど白石正明氏から『京都日出新聞』に連載された「山家」の記事をご提示いただいた。「浮世絵」という欄に、明治四一年(一九〇八)二月八日から大晦日の三日まで、二〇回にわたって掲載されたルポルタージュで、文末に「泉山」の筆名が付されている。

「泉山」の実名は審らかではないが、白石氏によれば、『京都日出新聞』編集委員中川元治郎の可能性があるといる。明治四一年五月一〇日付けのエスペラント関係記事に「中川泉山子訳」の文字があり、勘案すれば、「泉山」は第三回万国エスペラント大会に参加し

エスベラントの訳文なども手がけた「中川泉山子」なる人物に比定できるのではないかと類推されている。泉山子の名は、三十三間堂近くの住居に帰る夜道の経験を描いた「夜の大仏前」にも登場するが、客引きをする「売春婦」へのまなざしに容赦はない(明治四二年二月二日)。それよりさき、明治三九年九月二七日から八回連続で「大仏前の魔窟」なる記事が同紙「京都の暗黒面」欄に載ったが、そこには署名がなく、筆者を知ることとはできない。そこで「売醜婦」や窃盗犯たちの生活を綴った最後に、それ以外の「不正の徒」として挙げられた山家の描写が、二年後の「浮世絵」欄に載った山家のエピソードと共通するのは留意する必要があるだろう。

泉山の「山家」記事は、一見して差別的言辞に充ちている。「探検」という語に示されるように、未知の異集団に潜入して生活実態を観察・取材し、実況報告するという体裁で、いかにもセンセーショナルな書きぶりである。「内地に無智蒙昧人道の何たるかを解せぬ人物は沢山ある、中にも山家は普通の盗賊と違つて慥悍猛掠奪を是れ事とし到る処の家なき処に起臥をする、帝国の臣民として戸籍を有して居らぬのである(後略)。(明治四二年二月八日)」という連載

(一)の書き出しがそれを端的に示している。しかしてその「巢窟を探検して生活状態を極めた記事を掲載」する理由に、彼らが「自然に繁殖して社会に悪影響を及ぼして行く、頗る危険である」(同上)を挙げているのである。とはいえ、この泉山が当時においてことさら強固な差別意識の持ち主であったとは考えにくい。明治期に限らず戦前期の新聞は、庶民なかんずく社会的に「下層」とみなされる人びとに対しては往々にして侮蔑的・揶揄的な表現を用いており、たとえば『佐賀新聞』などにおいても同様の筆致は珍しくない。いわゆる社会面の警察がらみの記事には、とくに顕著である。新聞紙面は社会の風潮の反映ともいえるわけで、そうであるならばなおさら、泉山の同情のない記述は、読者の興味を掻きたてこそすれ、厳しい批判をよびおこすことはなかつたと推測する。

「山家」の「実像」  
記事の内容としては、連載(一)から(七)は山家の一般的な概略(八)以降が実地「探検記」である。なお、泉山は連載(二)の冒頭の「昨年の明治三九年にも山家の記事を連載したと述べている(明治四一年二月二日)。現時点でその記事を特定することはできな

いが、二年後に再び山家の連載を試みるのは「近時の山家」を知らしめるためで、「山家とて月進月歩するから」という理屈であった。

泉山のいうところの「山家」は、「サンカ」と訓ずることは自明らしく、またそのような呼称を冠せられる人びとが存在すること自体を、あえて説明する必要は感じていないようである。京都の市中・近郊に、普通に眼にする人びと、しかしもちろん京都人とは異質の存在であることも知悉しているはずという前提があるらしい。また警察との関わりを随所にちらつかせながら、警察用語に由来するとされる「山窩」を使用していないのは、いまだ「山窩」が用語として一般化していなかつたゆえなのだろうか。

泉山は山家を定義して、群雄割拠の時代に戦に敗れ山中に逃れた落武者が時代を経て零落し山賊に墮したものといい、「昔を尋ねれば由緒あるが今は乞食半分の泥棒半分」と断じている(明治四一年二月八日)。さらにその種類を「親代々系統的のもの」、「己れ丈一代のもの」、「ウ、一時のもの」に三分し、それぞれ解説を加えている。アは「漸次に世襲となり、随分悲惨な宛然で人間でないやうな畜生に近い経歴」の両親の

もとで五、六歳ころまで育った後は多く親に遺棄され、生きるために乞食をしつつ窃盗にも手を染める、成長後は同じような境遇の異性と結婚して子を産む、よつて「種族は倍々蕃殖する一方」という。イは「大抵良民の果で壮い時に素行が修らない親、弟に見放され勘当される、自棄を起す、悪い伴侶が出来る、流浪する、遂う山家の群に投」じた結果とする。ウは前二者とは「全く趣がちがふ、是れは悉く罪人であり、警察に追われて、即ち山家の部落を一時の隠遁所」とするが、「禽獣の如く猛いのみで智慮の足らぬ山家に一層奸計を伝授するから山家が癒々社会に悪影響を及ぼす」にいたるとする。近世非人の発生を説明した荻生徂徠の『政談』を彷彿させるが、さらに泉山は、彼らが遊郭にさがり「娼妓買」をすることにより「然るべき病気の媒介」になるとさえつけ加えている(明治四二年二月二日)。

連載(三)は乞食と山家の比較である。両者はそもそも「先天的性質が違つて居る」し居住地も違つて居る、乞食には得意場があり集団があり頭領の統率もきくが、山家は個人で「水草を追うて東漂西泊」するのみで団結心はないとする。はたまた経済観念もなく、性質は「至極慥悍」、「強盗や人殺しは

屁の河童」な山家は「人間の零落した乞食」とは異なり「全く半獣的人間」であるという（明治四二年二月三日）。

連載（四）では、山家の漂泊する場所とその住居・携帯品等を詳述する。すなわち「渡り鳥同然」に山中や墓地、河原の芦原の窪地や穴などに「襪襦製の天幕」を張って雨露を凌ぎ、日中は賭博、夜は「出稼ぎ」あるいは乞食で稼ぐという。泉山はここでセブリという語は用いていない（明治四二年二月四日）。

連載（五）では「余程進歩した」山家の仕事として「羅宇仕替」「鑄掛屋」「剃刀磨」などを挙げているが、一方で彼らを油断も隙もない窃盗犯と決めつけている。「窃盗の方が本職で正業は附」だから犬と警察官の鉄拳は何より恐ろしがるというのである。しかし、少数ながら「社会の美風に感化して少しも昔の倂がない」ような者もいるところを見ると「満更山家を良民化する事が出来ぬとも限らない」とも説く。社会の側が忌み嫌うから「僻み根性」も強まるのであって、適当な方法で導くことが肝要というわけである（明治四二年二月十五日）。

連載（六）は山家の恋愛と結婚について、（七）は妊娠・出産と死および葬儀について述べるが、

いずれも酷薄な表現が目立つ。

「欲望の単純な野蛮人になると恋愛は頗る濃厚」であるとか「分婉法は珍無類」とか「矢張人並に悲しいに違ひない」とか、これでもかというほど異相・異風を強調するのである（明治四二年二月七日）。

そしていよいよ探検談が始まる。いかにも異境に踏み込む探検家よろしく同僚と二人、売卜者にやつして京都東山の山中、山家の「巢窟」に入り込み、たくみに取材を開始する様子が冒険小説風に描かれる。後年の三角寛のサンカ小説もどきの筆ながら、好意ははるかに感じられない。出会った男女の暮らしぶりや身の上話が具体的に展開されるが、もとより真偽を確かめる術はない。しかし、地藏山・惣山・長柄・稻荷山裏・大亀谷・七面山裏・天神山妙見堂山科の松原三味・東福寺の藪・九条下加茂の磧・陶化橋・勸進橋、さらには小栗栖野八幡墓地・醍醐五里山の墓地・大江崎湖岸の芦原・柳谷・淀河岸の芦原等々、細かな地名を多数列記しているのはそれなりの根拠があつたことなのだろう。出会ったサンカの名前は、符牒とは思えないものも多いが、実名か仮名かそのあたりもしかとは分からない。当時の新聞社として、プライバシーへの配慮を期待するのは困難かもしれない。

「山家」へのまなざし

記事には、泉山自身の見聞のみならず、警察情報が多分に採用されていると思われるが、実際、警察は嫌疑対象者としてサンカを監視・監督する姿勢を明確にしていた。明治四四年から四五年にかけて発表された柳田國男の「イタカ及びサンカ」は、近代日本におけるサンカ論の嚆矢とされるが、そこで柳田の情報源として岐阜県大垣警察署長・広瀬寿太郎の名が挙げられ、広瀬がすでに明治二六年からサンカの問題を注視し研究してきたこと、広瀬の目には山家が犯罪集団と近似のものと映っていたことが紹介されている。柳田自身、大正一年に『国家学会雑誌』に提出した論文「所謂特殊部落ノ種類」において、サンカを「乞食モスレバ野荒シモ敢テ辞セズ」「特殊部落ノ問題中最モ解決シ難キ八此等ノ未定住者ナリ」として、治安対策上の必要を力説している。泉山の思考も、こうした論調と乖離してはいない。

泉山の連載は、サンカに関するルポルタージュとしては初期のものといえようが、その後もつぎつぎと発表される報告・研究は、牧歌的な存在にとらえるものであれ反社会的集団として厳しい視線を注ぐものであれ、猟奇的に「異人」を強調するものであれ、当然のこ

とながら時々々の社会情勢・社会思潮と無縁ではあり得なかつた。戦後のそれも同様である。いわゆるアカデミズムの研究者のほか、多くのジャーナリストがサンカ研究に従事しているのは、サンカという存在に、民俗学研究の対象にとどまらない何かを、私たちの「近代」を照射する大きな何かを感じとっているゆえではなからうか。

#### 【参考文献】

『柳田國男全集』6（筑摩書房・一九九八年）／同24（筑摩書房・一九九九年）／『三角寛サンカ選集』第六巻／同第七巻（現代書館・二〇〇一年）／同第八巻（現代書館・二〇〇四年）／同第十巻（現代書館・二〇〇五年）／赤坂憲雄『山の精神史』（小学館・一九九一年）／飯尾恭之『サンカ・廻遊する職能民たち』（批評社・二〇〇五年）／沖浦和光『幻の漂泊民・サンカ』（文藝春秋・二〇〇一年）／磯川全次『サンカ学入門』（批評社・二〇〇三年）／磯川全次『サンカと三角寛』（平凡社・二〇〇五年）／磯川全次『異端の民俗学』（河出書房新社・二〇〇六年）／杉山二郎『遊民の系譜』（青土社・一九九二年）／筒井巧『サンカ社会の深層をさぐる』（現代書館・二〇〇六年）／筒井巧『サンカと犯罪』（現代書館・二〇〇八年）／和田敏『サンカの末裔を訪ねて』（批評社・二〇〇五年）

ルパーから派遣ヘルパーの22年』(白崎朝子著)

DVD「ホームレス」と出会う子どもたち 製作:ホームレス問題の授業づくり全国ネット 肥下彰男

20年のときを越えて 部落問題に関する学生意識調査結果から 森実

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 23 第3章 近世における社会的地位 8 領主支配・政治権力、身分(集団)と身分制度 3 藤沢靖介

部落解放研究 16(広島部落解放研究所刊,2010.1):1,000円

広島県における部落解放運動の経緯 その行政闘争の側面を辿る 小森龍邦

部落解放教育における今日的課題としての進路保障 井上寿美、笹倉千佳弘

他者のまなざし=部落はどう見られてきたか 部落ディアスポラ論序論 笹川俊春

被差別部落の文化の研究 方法序説 青木秀男

被差別部落と公教育に関する「定説」の批判的検討 いわゆる部落学校と権力(のテクノロジー) 小早川明良

在日一世女性の高齢者福祉問題 広島市西区福島地区の通所介護施設の事例より 安錦珠

部落解放研究 188(部落解放・人権研究所刊,2010.1):1,000円

特集 第4回部落解放・人権研究者会議

『大阪の部落史』第十巻(本文編)の刊行によせて 渡辺俊雄/食肉業・食肉労働に対する偏見と差別撤廃をめざして 第二次プロジェクトの報告書発刊を踏まえて 友永健三/2008年度版『CSR報告書』における人権情報・グッドプラクティス調査の結果と課題 中村清二/大阪の部落女性実態調査から見えてきたもの 内田龍史

大坂四ヶ所の支配・御用と勤進 塚田孝『近世大坂の非人と身分的周縁』に関わらせて のびしょうじ

「第三次とりまとめ」と「人権教育の推進に関する取組状況の調査結果」が示唆するもの 平沢安政

多言語環境に育つ子どもたちの母語保持伸長と日本語習得(上) その現状と課題 櫻井千穂

国勢調査小地域集計を利用した被差別部落の実態把握の可能性 妻木進吾

部落解放研究くまもと 58号(熊本県部落解放研究会刊,2009.10)

差別をなくす法制度の検討 障害者権利条約と人権侵害救済法案によせて 東俊裕

差別発言から学んだこと 小山照博

S高校での差別発言事件に学ぶ 高同研の課題として 福永洋一

本の紹介

妙に納得、読んで納得 『史料で読む部落史』(山本尚友著) 大森奈美子/阿南重幸著 『被差別民の長崎・学

貿易とキリシタンと被差別部落』山本尚友 部落解放ひろしま 86号(部落解放同盟広島県連合会刊,2010.1):1,000円

特集 法期限切れから8年 県内の部落の課題と克服への思索

解放運動の人間像 27 「人間なるもの」の考究と理論学習 小森龍邦

部落問題研究 191(部落問題研究所刊,2009.12):1,111円

近代京都の町共同体に関する基礎的考察 西陣・妙蓮寺前町を素材に 藤井正太

書評

梅田千尋著『近世陰陽道組織の研究』澤博勝/広川禎秀編『近代大阪の地域と社会変動』飯塚一幸

史料紹介 北原泰作文書(その2)昭和十七年「日記」本井優太郎、西尾泰広

リージョナル 13(奈良県立同和問題関係史料センター刊,2010.1)

般若寺層塔について 山川均

明治前期奈良県の遊郭・貸座敷に関する史料をめぐって 井岡康時

三業惑乱における大和国穢多村の動向 1 洞村教宗寺門徒の去就 奥本武裕

西里の回り地蔵習俗について 津浦和久

立命館経済学 341号(立命館大学経済学会刊,2009.9):500円

歴史における「身分」をどう教えるか 社会科教科書記述の分析を中心に 畑中敏之

リベラシオン 136(福岡県人権研究所刊,2009.12):1,050円

特集 ボランティアとは何か

史料紹介 高松差別裁判糾弾闘争における「馬場公会堂事件」に関する史料 上 石瀧豊美

第28回九州地区部落解放史研究集会報告

第15回全国部落史研究大会報告

和歌山研究所通信 35(和歌山人権研究所刊,2010.1)

和歌山の部落史編纂事業に関わって 小倉英樹

和歌山研究所通信 36(和歌山人権研究所刊,2010.3)

今、あらためて「実態」をみる 池田清郎

市民ウォッチャーの「同和奨学金滞納状況全国調査」で明らかになったこと 寺園敦史

ねっとわーく京都 255 (ねっとわーく京都21刊, 2010.4) : 500円

同和奨学金返還一律免除は欠陥条例だった 新たな負担3億4千万円を抱えてしまった京都市 寺園敦史

ヒューマンJournal 191 (自由同和会中央本部刊, 2009.12) : 500円

融和運動の再評価 7 官を動かす三好伊平次のこと 宮崎学

ヒューマンJournal 192 (自由同和会中央本部刊, 2010.3) : 500円

福岡県久留米市立南筑高校教諭の差別文書郵送について 自由同和会福岡県本部の声明

融和運動の再評価 8 自彊と解放 岡本弥のこと 宮崎学

ヒューマンライツ 262 (部落解放・人権研究所刊, 2010.1) : 525円

格差社会への挑戦 政権交代と政治の役割 山口二郎

ヒューマンライツ 263 (部落解放・人権研究所刊, 2010.2) : 525円

大学における、これからの同和・人権教育、研究のために 若手研究者が先輩研究者に学び・考える 1 上杉孝實先生 阿久澤麻理子

ヒューマンライツ 264 (部落解放・人権研究所刊, 2010.3) : 525円

大学における、これからの同和・人権教育、研究のために 若手研究者が先輩研究者に学び・考える 2 川元祥一先生 阿久澤麻理子

ひょうご部落解放 135 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2009.12) : 700円

部落解放研究第30回兵庫県集會報告書

記念講演 部落解放運動のかなたへ 高山文彦

本の紹介 『差別と日本人』(野中広務・辛淑玉著) 竹本貞雄

広島修大論集 96号 (広島修道大学学術交流センター刊, 2010.2)

人権の視点抜きでの道徳教育は可能か? 「いじめ指導」を例にして 大庭宣尊

部落解放 623 (解放出版社刊, 2010.1) : 630円

特集 生きづら子どもたち

学校における排除と不平等の構造 青木紀/スクールソーシャルワーカーから見た児童虐待の現状と課題 岩永靖/みんなが集まる「居場所」づくり CVVが考える「居場所活動」 Children's Views & Voices事務所/「社会

的排除」とは何か? 子どもたちの生きづらさを理解するために 岩田正美

本の紹介

『シンティ女性三代記(上・下巻)』 友永健三/『差別のカラクリ』(奥田均著) 渡辺俊雄/『日本の人権保障システムの改革に向けて』(日本弁護士連合会編)/『子どもの貧困白書』(子どもの貧困白書編集委員会編)/『絞首刑』(青木理著)/『冤罪』(菅谷利和著)/『八〇万本の木を植えた話』(イ・ミエ著)/『ドキュメント高校中退』(青砥恭著)

リサーチ会社・広告代理店・デベロッパーの差別の構造 いわゆる“土地差別調査事件”の真相 赤井隆史

「かわ」の世界への誘い 『皮革の歴史と民俗』刊行によせて のびしょうじ

おいしい「山の粥」を作る 部落文化の実践 川元祥一 資料 「差別ハガキ偽造事件」について 最終見解と決意 部落解放同盟福岡県連合会

部落解放 624号 (解放出版社刊, 2010.1) : 1,050円

第40回部落解放・人権夏期講座報告書

部落解放 625号 (解放出版社刊, 2010.2) : 630円

特集 精神科ユーザー隔離収容政策の転換を

本の紹介

『世界一のパン チェルシーパンズ物語』(市居みか絵と文, 中島敏子ルポ)/『私はマイノリティ あなたは? 難病をもつ「在日」自立「障害」者』(李清美著)/『ルポ母子家庭「母」の老後、「子」のこれから』(関千枝子著)/『橋の上の「殺意」 畠山鈴香はどう裁かれたか』(鎌田慧著)/『狙われた「集団自決」 大江・岩波裁判と住民の証言』(栗原佳子著)/『いのちをいただく』(内田美智子文, 諸江和美絵, 佐藤剛史監修)

町田宗夫師のご逝去を悼む 小森龍邦

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 22 第3章 近世における社会的地位 7 領主支配・政治権力、身分(集団)と身分制度 2 藤沢靖介

部落解放 626号 (解放出版社刊, 2010.2) : 1,050円

部落解放研究第43回全国集會報告書

部落解放 627号 (解放出版社刊, 2010.3) : 630円

特集 「韓国併合」100年

本の紹介

『長州藩維新団 明治維新の水平軸』(布引敏雄著) 桐原健真/『生きていくための短歌』(南悟著)/『施設で育った子どもたちの居場所「日向ぼっこ」と社会的養護』(日向ぼっこ編著)/『介護労働を生きる公務員へ

- 地域と人権 1085 (全国地域人権運動総連合刊, 2010.2.15) : 150円  
 国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 3 丹波正史
- 地域と人権 1086 (全国地域人権運動総連合刊, 2010.3.15) : 150円  
 福岡・立花町「解同見解」批判 中 「糾弾」至上主義の本音  
 国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 4 丹波正史  
 市民が「差別者」にされた理由 滋賀県東近江市の「見解」について 寺園敦史
- 地域と人権京都 564号 (京都地域人権運動連合会刊, 2010.1.1) : 150円  
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 4  
 地域と人権京都 565号 (京都地域人権運動連合会刊, 2010.1.15) : 150円  
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 5  
 地域と人権京都 566号 (京都地域人権運動連合会刊, 2010.2.1) : 150円  
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 6  
 地域と人権京都 567号 (京都地域人権運動連合会刊, 2010.2.15) : 150円  
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 7  
 地域と人権京都 568号 (京都地域人権運動連合会刊, 2010.3.1) : 150円  
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 8  
 地域と人権京都 569号 (京都地域人権運動連合会刊, 2010.3.15) : 150円  
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 9
- ちくま 466 (筑摩書房刊, 2010.1) : 100円  
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 32 第八章 密出国でモスクワ留学へ 1 沖浦和光  
 平野小剣を追う 3 国家主義運動への転身 朝治武  
 ちくま 467 (筑摩書房刊, 2010.2) : 100円  
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 33 第八章 密出国でモスクワ留学へ 2 沖浦和光  
 ちくま 468 (筑摩書房刊, 2010.3) : 100円  
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 34 第八章 密出国でモスクワ留学へ 3 沖浦和光
- 創 443号 (創出版刊, 2010.2) : 600円  
 吉本隆明氏の著書に差別表現との抗議が 朝日新聞出版刊『老いの超え方』が出荷停止、在庫断裁に 長岡義幸  
 であい 573 (全国人権教育研究協議会刊, 2009.12) : 150円  
 人権文化を拓く 150 アイヌ協会に名称変更 竹内渉  
 であい 574 (全国人権教育研究協議会刊, 2010.1) : 150円  
 人権文化を拓く 151 おわりから何かがはじまる... 山中千枝子  
 であい 575 (全国人権教育研究協議会刊, 2010.2) : 150円  
 人権のまちをゆく 49 もやいなおしのまち 水俣  
 人権文化を拓く 152 映画『南京 引き裂かれた記憶』の制作に関わって 松岡環  
 同和教育論究 29 (同和教育振興会刊, 2009.12) : 1,500円  
 岩本慶輝顧問追悼特集号  
 追悼史料紹介 近世真宗差別問題史料 本願寺末寺帳  
 杉本昭典 / 追悼論文1 「格差」問題と部落差別 齊藤真 / 追悼論文2 「御同朋の教学」構築の前提 親鸞の生き方に学ぶ 神戸修 / 追悼論文3 国家の部落差別における当事者性について '89.8.4「法務省通知」批判を通して 岩本朋樹 / 追悼座談会 「岩本慶輝顧問と同朋運動」  
 どの子ども伸びる 411 (どの子ども伸びる研究会刊, 2010.1) : 735円  
 「人権教育」批判 連載「人権教育」批判を終結するにあたって 1 谷口幸男  
 どの子ども伸びる 413 (どの子ども伸びる研究会刊, 2010.2) : 700円  
 「人権教育」批判 連載「人権教育」批判を終結するにあたって 2 谷口幸男  
 どの子ども伸びる 414 (どの子ども伸びる研究会刊, 2010.3) : 735円  
 「人権教育」批判 連載「人権教育」批判を終結するにあたって 3 谷口幸男  
 日本建築学会計画系論文集 647号 (日本建築学会刊, 2010.1)  
 京都盲啞院における空間構成と教育プログラムに関する研究 木下知威、大原一興  
 ねっとわーく京都 252 (ねっとわーく京都21刊, 2010.1) : 500円  
 ウォッチャーレポート 66 運動団体の「公益性」を認めず 解放センター用地ただ貸し事件高裁判決 寺園敦史  
 ねっとわーく京都 253 (ねっとわーく京都21刊, 2010.2) : 500円  
 不正な同和枠融資で8億円もの焦げ付き 岡根竜介

- て 天王寺長吏組織下における様相 小野田一幸 / 宝曆 天明期における「長吏の組織」と大坂町奉行 高久智広 / 戦後初期高知県の部落解放運動 1945～1960 吉田文茂 / 戦後初期広島県の部落解放運動 1945～1960 割石忠典
- 人権21 調査と研究 204 (おかやま人権研究センター刊, 2010.2) : 650円  
特集 立花一也先生を悼む
- 人権と部落問題 796 (部落問題研究所刊, 2010.1) : 630円  
特集 貧困と子どもの人権
- 文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民 『閑 (そう) 瑣談』より 小原亨
- 本棚 東京部落問題研究会『東京部落問題研究会50年の歩み』 中野功
- 人権と部落問題 797 (部落問題研究所刊, 2010.2) : 630円  
特集 セーフティネットの危機
- 文芸の散歩道 笹川俊春の「丑松論」を論評する 川端俊英
- 本棚 成澤榮壽著『島崎藤村「破戒」を歩く<下>「藤村」を歩く』 谷彌兵衛
- 人権と部落問題 798 (部落問題研究所刊, 2010.2) : 1,155円  
特集 国連から見た日本の人権  
追悼 杉之原寿一先生  
理事長としての杉之原さん 学者としての杉之原さん 東上高志 / 杉之原寿一先生の人と業績への回想 鳥飼慶陽 / 杉之原寿一先生に思う 部落問題での功績と、今後の私たちの課題 丹波正史 / 「国民的融合」路線の優位性について 大阪府・八尾市からみて 内藤義道
- 人権と部落問題 799 (部落問題研究所刊, 2010.3) : 630円  
特集 講座「住民自治と同和行政の終結」  
テレビ・ドラマ「坂の上の雲」第一部を見る 加藤拓川と部落問題に触れて 成澤榮壽  
「河合村事件」の思い出 1955年の部落解放運動 仲上――
- 本棚 古川康彦著『新たなまちづくりに挑む 東大阪市のこころみ』 広原盛明
- 文芸の散歩道 早船ちよ著・大河小説『ちさ・女の歴史』第一部『峠』に描かれた開明的な母親像 桑原律
- 季刊人権問題 358 (兵庫人権問題研究所刊, 2010.1) : 735円
- 八鹿高校事件の真実 野中広務・辛淑玉共著『差別と日本人』を読み解く 三木裕和  
振興会通信 90 (同和教育振興会刊, 2009.12)  
「御同朋の教学」と「差別の現実から出発する」ということについて 6 岩本孝樹
- 信州農村開発史研究所報 110号 (信州農村開発史研究所刊, 2009.12)  
「長野県部落問題関係記事概要」こぼれ話 3 記録に見る「冤罪」と強制移転事件 川向秀武
- 月刊スティグマ 162 (千葉県人権啓発センター刊, 2009.12) : 500円  
特集 キーワード=人権問題+解放運動+千葉県+私たち  
千葉県の部落問題と解放運動の現況 鎌田行平
- 月刊スティグマ 163 (千葉県人権啓発センター刊, 2010.1) : 500円  
特集 気管切開の子どもと暮らそう(上)  
明治維新後遺症としての日本人...差別問題をすべての人のものにするための試論 8 「循環の思想」の核心...「穢れ」と「清め」そして部落の先祖の仕事 鎌田行平
- 月刊スティグマ 164 (千葉県人権啓発センター刊, 2010.2) : 500円  
明治維新後遺症としての日本人...差別問題をすべての人のものにするための試論 9 清めの仕事と「竹」細工の関係 鎌田行平
- ソシオロジ 167 (京都大学文学部社会学研究会刊, 2010.2)  
同和行政における執行基準の画一化と逸脱の条件 京都市における属地属人方式の検討を通して 山本崇記
- 月刊地域と人権 312 (全国地域人権運動総連合刊, 2010.2) : 350円  
同和教育を始めた頃、いま学ぶこと 大同啓五  
「部落問題」の今を考える 戦後の歴史的变化をふまえて 石倉康次
- 問われる行政の主体性と「解同」のえせ差別行為 植山光朗
- 月刊地域と人権 313 (全国地域人権運動総連合刊, 2010.3) : 350円  
行政と運動による「差別」づくり 滋賀県東近江市・同和地区所在地問い合わせ事件の顛末 寺園敦史
- 地域と人権 1084 (全国地域人権運動総連合刊, 2010.1.15) : 150円  
2010新春鼎談 杉之原氏の業績を語り逆流現象を検証 丹波正史, 鳥飼慶陽, 尾川昌法, 植山光朗



「満州」における「からゆき」救済事業 益富政助と満州婦人救済会をめぐって 3 倉橋克人  
 中国戦線に形成された日本人町 従軍慰安婦問題補論 倉橋正直  
 「醜業婦」と「美人」のあいだでゆらぐ芸妓像 東京大正博覧会と大正天皇即位礼をめぐる『廓清』の論説を中心に 林葉子  
 堺利彦の第一次共産党事件獄中書簡 1 市ヶ谷刑務所未決期 小正路淑泰  
 グローブ 60 (世界人権問題研究センター刊, 2010.1)  
 融和運動が提起するもの 本郷浩二  
 朝鮮籍在日朝鮮人の韓国入国問題 鄭栄桓  
 性犯罪者への処遇プログラムにかかわって 中村正  
 改めて「部落差別の起源」を問うことを考える 外川正明  
 国際人権ひろば 89 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2010.1): 350円  
 特集 日韓交流シンポジウム「外国籍市民と共に暮らす地域を考える」  
 こべる 202 (こべる刊行会刊, 2010.1): 300円  
 尼崎だより 32 人は人にかかわって、はじめて人となる 中村大蔵  
 自分史のこころみ 5 「朝鮮」を受け入れる 「在日」から見えてくるもの 2 金光敏  
 最近読んだ本から 20 あらためて「屠場差別」について考える 佐川光晴『牛を屠る』 小澤覚  
 いのちを生きる 27 うれしい出会い 長谷川洋子  
 映画の現場 写真と文 小林茂  
 こべる 203 (こべる刊行会, 2010.2): 300円  
 ひろば128 地域で共に生きる 障害者政策の新しい動き 大谷強  
 最近読んだ本から21 個性的な自分史として ホーキング青山『差別をしよう!』 高田嘉敬  
 いのちを生きる28 通夜の席で 長谷川洋子  
 記憶の旅から明日へ 写真提供と文 小林茂  
 こべる 204 (こべる刊行会刊, 2010.3): 300円  
 ひろば 129 「ごちゃまぜ」の生き方 一步前へ 坂倉加代子  
 播州からの便り 4 性犯罪と裁判員裁判 傍聴して考えたこと 福岡ともみ  
 自分史のこころみ 6 自己を見つめ、歴史につながる 「在日」から見えてくるもの 3 金光敏  
 いのちを生きる 29 人びとが幸せになれるお金の使い道とは 長谷川洋子

記憶の旅から明日へ 写真提供と文 小林茂  
 こべる 205 (こべる刊行会刊, 2010.4): 300円  
 ひろば130 アメリカにおける「両側から超える」試み ウィリアム・J・ウィルソン『アメリカのアンダークラス』への遅れた訳者解説 平川茂  
 いのちを生きる30 「生身といのち」を実感してほしい 長谷川洋子  
 記憶の旅から明日へ 写真提供と文 小林茂  
 こりあんコミュニティ研究会通信 4号 (こりあんコミュニティ研究会刊, 2010.2)  
 戸手四丁目河川敷地区の暮らしの記憶 1 河原のまちの状況 新井信幸  
 広島での日高齢者問題 安錦珠  
 「集中」・「分散」するコリアン・コミュニティで考えること 中山徹  
 在日朝鮮人史研究 39 (緑蔭書房刊, 2009.10): 2,400円  
 福音印刷合資会社と在日朝鮮人留学生の出版史 (1914~1922) 小野容照  
 大阪 濟州島航路の経営と濟州島民族資本 「済友社」・「濟州島汽船」・「企業同盟」 塚崎昌之  
 戦前・戦時下における石川県の在日朝鮮人の諸相 人口移動・内鮮融和団体・朝鮮飴売り 砂上昌一  
 常磐炭田朝鮮人戦時動員被害者と遺族からの聞き取り調査 龍田光司  
 「解放」直後の福岡県における朝鮮人「帰還」 鈴木久美  
 神奈川における在日朝鮮人の民族教育 1945~49年を中心に 今里幸子  
 資料紹介 『外国人登録関係』 金浩  
 狭山差別裁判 412号 (部落解放同盟中央狭山闘争本部刊, 2009.7): 300円  
 特集 再審と証拠開示  
 野間宏と関巡査部長問題 6 庭山英雄  
 狭山差別裁判 413号 (部落解放同盟中央狭山闘争本部刊, 2009.8): 300円  
 野間宏と関巡査部長問題 7 庭山英雄  
 試行社通信 281号 (八木晃介刊, 2010.3)  
 解放運動組織の解散  
 しこく部落史 12号 (四国部落史研究協議会刊, 2010.2): 1,000円  
 特集 第15回全国部落史研究大会  
 土佐の自由民権と部落問題 筒井秀一 / 紀州藩非人身分の諸相 藤井寿一 / 近世大坂市中における垣外番について

- の営み 藤沢靖介  
 解放新聞東京版 734号(解放新聞社東京支局刊, 2010.2.15): 90円  
 東京を中心とする部落・差別の歴史 13 全国一律の差別法令と江戸後期の動向 藤沢靖介  
 解放新聞東京版 735号(解放新聞社東京支局刊, 2010.3.1): 90円  
 東京を中心とする部落・差別の歴史 14 近世社会 その変化と部落の位置 藤沢靖介  
 解放新聞東京版 736号(解放新聞社東京支局刊, 2010.3.15): 90円  
 東京を中心とする部落・差別の歴史 15 幕末・明治維新时期 活発化する被差別部落 藤沢靖介  
 解放新聞広島県版 1980号(解放新聞社広島支局刊, 2010.1.25)  
 2010年部落解放運動の方向 上 小森龍邦  
 解放新聞広島県版 1981号(解放新聞社広島支局刊, 2010.2.5)  
 2010年部落解放運動の方向 下 小森龍邦  
 解放新聞福岡県版 441号(解放新聞社福岡支局刊, 2009.12): 50円  
 「差別ハガキ偽造事件」運動への意見と検証を 有識者7人での提言委員会設置  
 解放新聞三重版 288号(解放新聞社三重支局刊, 2010.2.1)  
 戦後の部落解放運動 3 磯部会談 山崎智  
 架橋 22号(鳥取市人権情報センター刊, 2010.3)  
 「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」の持つ意味、アイヌ政策推進会議に求めるもの、アイヌ民族の未来像について 萱野志朗  
 人と人としての希望ある出会いとするために~「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」の活動をとおして 生田武志  
 心の居場所を求める子どもたち いじめの連鎖を断つために 北村年子  
 ライフストーリー調査への思いとこれから 林光宏  
 語る・かたる・トーク 178(横浜国際人権センター刊, 2009.12): 500円  
 わたしと部落とハンセン病 49 林力  
 信州の近世部落の人びと 55 一把稲と旦那場 27 斎藤洋一  
 同和問題再考 108 神様も「部落」を差別? 田村正男  
 部落差別の現実 89 露骨な結婚差別 2 江嶋修作  
 語る・かたる・トーク 179(横浜国際人権センター刊, 2010.1): 500円  
 わたしと部落とハンセン病 50 林力  
 信州の近世部落の人びと 56 一把稲と旦那場 28 一把稲は部落の人びとへの「初穂」のようなものではないか 斎藤洋一  
 同和問題再考 109 根が深い「穢れ」の意識 田村正男  
 部落差別の現実 90 古典的差別 1 江嶋修作  
 語る・かたる・トーク 180(横浜国際人権センター刊, 2010.2): 500円  
 わたしと部落とハンセン病 51 林力  
 信州の近世部落の人びと 57 吉本隆明著『老いの超え方』へ一言 斎藤洋一  
 同和問題再考 110 足元に迫る「ヒンズー教の影」 田村正男  
 部落差別の現実 91 古典的差別 2 江嶋修作  
 カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより 19(カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター刊, 2010.1)  
 2009年対話集会 「部落差別」は人と人との関係性を照射してきたのか[報告] 佐藤めぐみ, 篠原誠, 友永健吾, 高濱和浩, 福岡ともみ  
 聖歌における見えない差別 5 太田勝  
 かわとはきもの 150(東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2009.12)  
 靴の歴史散歩 95 稲川實  
 皮革関連統計資料  
 かわとはきもの博物館めぐり 7 日本はきもの博物館 1 福原一郎  
 紀州経済史文化史研究所紀要 30号(和歌山大学紀州経済史文化史研究所刊, 2009.12)  
 一九世紀、紀州藩のかわた村々綿方臘皮綿方体制 藤本清二郎  
 季節よめぐれ 252号(京都解放教育研究会刊, 2010.1)  
 死んだら終わり、だから生きるんだ 具志アンデルソン 飛雄馬  
 季節よめぐれ 253号(京都解放教育研究会刊, 2010.2)  
 学校のサンクチュアリ マイノリティ理解と在日コリアン教育 金光敏  
 京都文教短期大学研究紀要 48(京都文教短期大学刊, 2010.3)  
 知的障害者福祉の変遷 京都、滋賀を中心として2 石野美也子  
 キリスト教社会問題研究 58号(同志社大学人文科学研究センター刊, 2010.1): 1,000円

輔

本の紹介 『『遠野物語』を読み解く』（石井正己著）

解放新聞 2452号（解放新聞社刊，2010.1.11）：80円  
教育の課題と展望 同和教育が不可欠 富田稔解放新聞 2453号（解放新聞社刊，2010.1.18）：80円  
解放の文学 45 「震災後」を生きるとは 木辺弘晃と  
『無明銀河』 音谷健郎

今週の1冊 『アマテラスの誕生』（溝口睦子著）

解放新聞 2454号（解放新聞社刊，2010.1.25）：80円  
山口公博が読む今月の本『日本の深層文化』（森浩一著）／『松下竜一の青春』  
（新木安利著）／『闘うレヴィ＝ストロース』（渡辺公  
三著）今週の1冊 『へこたれへん 差別はきつとなくせる』  
（松村智広著）解放新聞 2455号（解放新聞社刊，2010.2.1）：120円  
2010年度一般運動方針（第1次草案）解放新聞 2456号（解放新聞社刊，2010.2.8）：120円  
解放の文学 46 兵隊作家の戦後とは 火野葦平と『革命  
前後』 音谷健郎解放新聞 2457号（解放新聞社刊，2010.2.15）：80円  
映画「インビクタス 負けざる者たち」 中村一成

今週の1冊 『ルポ 貧困大国アメリカ2』（堤未果著）

解放新聞 2458号（解放新聞社刊，2010.2.22）：80円  
今月の本『「悪所」の民俗誌 色町・芝居町のトポロジー』（沖  
浦和光著）／『平家の群像 物語から史実へ』（高橋昌  
明著）／『愚の力』（大谷光真著）

今週の1冊 『自由訳イマジニ』（新井満著）

解放新聞 2459号（解放新聞社刊，2010.3.1）：80円

今週の1冊 『つないで、手と心と思い』（原案 本多真  
紀子，絵 佐谷洋子）ぶらくを読む 49 部落に守られ育てられた革命家梅川文  
男 湧水野亮輔

解放新聞 2460号（解放新聞社刊，2010.3.8）：80円

解放の文学 47 大江健三郎『水死』 音谷健郎

今週の1冊 『ホームレスと人権』（九州ホームレス支援  
団体連合会編）解放新聞 2461号（解放新聞社刊，2010.3.15）：80円  
第67回全国大会特集号解放新聞 2462号（解放新聞社刊，2010.3.22）：80円  
部落解放同盟綱領改正案解放新聞愛知版 362号（部落解放同盟愛知県連合会刊，  
2010.3）：100円近年の人権・部落問題意識調査結果と調査の活用 内田  
龍史解放新聞大阪版 1808号（解放新聞社大阪支局刊，201  
0.1.4・11）：70円「新おおさか人権センター（仮称）への移転」府連の見  
解解放新聞大阪版 1810号（解放新聞社大阪支局刊，201  
0.1.25）：70円大阪の部落史を歩く 8 「博労の村」を実現した部落 上  
摂津能勢郡下田村の闘い のびしょうじ解放新聞大阪版 1816号（解放新聞社大阪支局刊，201  
0.3.15）：70円大阪の部落史を歩く 9 「博労の村」を実現した部落 下  
能勢下田村の村内民主化運動 のびしょうじ解放新聞改進黨 393号（部落解放同盟改進黨支部刊，20  
09.12）民主党マニフェストを読む 2 少子化対策の基本は仕  
事と育児の両立保障 同和教育が大切にしたこと解放新聞改進黨 394号（部落解放同盟改進黨支部刊，20  
10.1）部落問題の解決と同和行政の放棄を目的とした「総点検  
委」が提出した「報告書」を許すな！解放新聞改進黨 395号（部落解放同盟改進黨支部刊，20  
10.1）民主党マニフェストを読む 3 教育費は誰が負担すべ  
きなのか 同和奨学金制度が求めてきたこと解放新聞改進黨 396号（部落解放同盟改進黨支部刊，20  
10.2）民主党マニフェストを読む 4 子どもたちに信頼される  
教育とは 同和教育が問い続けた教員の立ち位置解放新聞京都版 848号（解放新聞社京都支局刊，2010.  
3.10）

コミュニティセンターの現状 1

解放新聞滋賀版 1857号（部落解放同盟滋賀県連合会  
刊，2010.2.15）東近江市民による電話での愛荘町役場への同和地区問  
い合わせ差別事件にかかる見解 東近江市解放新聞東京版 731・732号（解放新聞社東京支局刊，  
2010.1.1・15）：180円東京を中心とする部落・差別の歴史 11 独自の集団と2  
系統からの支配 藤沢靖介解放新聞東京版 733号（解放新聞社東京支局刊，2010.  
2.1）：90円

東京を中心とする部落・差別の歴史 12 長史かわた集団

# 収集逐次刊行物目次 (2010年1月～3月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

- 朝田教育財団だより 12 (朝田教育財団刊, 2010.1)  
「同和」奨学金の返還免除をめぐる2つの訴訟について  
の考察 国府泰道
- 明日を拓く 79 (東日本部落解放研究所刊, 2009.2) :  
1,050円  
特集 裁判員制度をめぐる  
千葉県の部落問題と解放運動の現況について 鎌田行平
- 明日を拓く 80 (東日本部落解放研究所刊, 2009.3) :  
1,050円  
特集 先住民族の現在 今をどう語るか  
「先住民族の現在」が問いかけるもの 特集「先住民族  
の現在 今をどう語るか」にあたって 吉田勉/インタ  
ビュー アイヌ民族として生まれて 多原香里さん 聞き  
手・友常勉/インタビュー アイヌ民族がきちとした  
歩みをはじめられるかどうか 長谷川修さんに聞く 聞  
き手・千本秀樹/資源開発への異議申し立てと先住民族  
の自己決定権 藤岡美恵子/インタビュー フィリピンの  
先住民族との関わりを通して 和田献一さんに聞く  
「信頼しかない 圧倒的な失敗、しかし性懲りもなく」  
聞き手・井桁碧/スペイン・バスクの被差別民アゴテと  
彫刻家サビエル・サンチョテナ 友常勉
- 跡地発 42 (浅香人権文化センター刊, 2010.1)  
十人十色の人権問題 33 「処罰ではなく希望」を 薬物  
依存からの回復に支援を 谷口伊三美
- IMADR-JC通信 161 (反差別国際運動日本委員会刊, 201  
0.2) : 750円  
特集 人種差別撤廃条約と日本におけるその実施  
ウィングスきょうと 96号 (京都市女性協会刊, 2010.  
2)  
図書情報室新刊案内  
『この世でいちばん大事な「カネ」の話』(西原理恵子  
著) / 『よくわかるDV被害者への理解と支援 対応の基  
本から法制度まで現場で役立つガイドライン』(石井朝  
子編著)  
解放教育 506 (解放教育研究所編, 2010.1) : 770円  
特集 人間関係づくりの現在  
解放教育 507 (解放教育研究所編, 2010.2) : 770円  
特集 若い教師とともに創る部落問題学習  
解放教育 508 (解放教育研究所編, 2010.3) : 770円  
特集 熱と光あふれるザ・討論会 明るく!元気に!反  
差別!シンポジウムinみえ人権フォーラム  
解放教育 509 (解放教育研究所編, 2010.4) : 770円  
特集 「つながり」を高める学級集団づくり  
書評 好井裕明著『排除と差別の社会学』 違和感とのつ  
きあい方 中島勝住  
解放新聞 2449号 (解放新聞社刊, 2009.12.21) : 80円  
「差別八ガキ偽造事件」について 最終見解と決意 部落  
解放同盟福岡県連合会  
解放新聞 2450号 (解放新聞社刊, 2009.12.28) : 80円  
山口公博が読む今月の本  
『うさぎのミミリー』(庄野潤三著) / 『西行物語 全  
訳注』(桑原博史著) / 『チェーホフ短篇集』(松下裕  
編訳)  
今週の1冊 『ストップ!風力発電』(鶴田由紀著)  
解放新聞 2451号 (解放新聞社刊, 2010.1.4) : 160円  
人道主義・融和・部落解放 岡崎精郎の情熱 湧水野亮

## 事務局よりお知らせ

今年度の部落史出張講座の開催が決まりました。今年は崇仁地区の歴史についての講座を、4回にわたって地元のコミュニティセンターで開催します。是非ふるってご参加ください。また、昨年度の部落史連続講座の講演録ができあがりました。ご希望の方はFAX・メールでご連絡下さい。  
4月より開室時間が10時から11時になりました。また、月2回、木曜日を閉室します(詳しくはホームページをご覧ください)。ご不便をおかけしますが、よろしく願い致します。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩2分